

東京保姆伝習所 所長石原キク

— 弟子の見た石原キク —

倉賀野 昌子

(昭島ナオミ保育園)

目 次

- I. はじめに
- II. 教育者石原キク
 - (1) 石原キクの力の源泉
 - (2) 石原キクの教育の信念
- III. 石原キクの人間性
 - (1) 厳しき (2) 優しき (3) ユーモア
- IV. おわりに—石原キクの遺産—

I. はじめに

石原キクは私の恩師である。生前の石原と直接関係があったのは、在学中の2年間だけである。数多くの弟子が卒業後も石原の許に残り、母校で共に働き、直接指導を受け、より深く交わった。それにもかかわらず持てる事の短かかった私が「石原キク」を書き残そうと思ったのは、昭和54年の才32回保育学会で「石原キクの律動の根本精神」について発表した帰り道、ある方から「石原先生の事を書いておかないと、知っている人がいなくなりますよ」と忠告を受け、心に残っていた為である。去る57年12月4日東京目白にある椿山荘にて、50年間石原の同労者として、伝習所で日本画を教えていた鈴木主子師、並びに古文を担当していた目良寿子師を囲み、直弟子ら20名が集い、「生誕100年記念石原キク先生を偲ぶ会」を持った。異口同音に「石原キクの精神」を受けた感謝をのべ、石原キクの名を残そうと誓い合い、散会した。

石原キクは、倉橋惣三と時を同じくして、幼児教育の専門職の先覚者として立ち、以後50年、この道ひとすじにオー線に活躍する多くの弟子を育て、日本の幼児教育の底辺を支えた人である。その大きな功績にもかかわらず、日本の保育史に石原キクの名前は殆ど出てこない。石原が七くわって15年、彼女が生涯をかけて育成した学校「東京保姆伝習所」は法人名すら変更され、「伝習所」という明治の創立を思い起こすキーワードは、幣履の如く捨て去られてしまった。しかし石原の残した弟子達は全国に散らばり、オー線にしっかりと根を下し活躍し続けている。昭和2年才16回卒のMさんは、「石原先生の担当は、カリキュラム、児童心理学、律動、フレーベルの教育学、思物等であって、

私達は石原先生が米国で学ばれた最新の保育学を教えていただいた。昭和20年の敗戦後、米国の占領政策と共に入って来た内容、他大学等で新しい教育として、初めて教えられた事柄等は、すでに大正時代に石原先生によって、私達は教えていただいた。おかげでいつも私達は胸を張って働く事が出来たのです。」と語る。現在も石原の弟子は北海道から沖縄にまで亘り、石原の精神により、幼児教育を進めている。石原の精神とは何かを確認し、残す事が今回の目的である。

II. 教育者石原キク、(1) 石原キクの力の源泉

石原の力の源泉、それはキリスト教の信仰、神への依り頼みである。生前常々「わが杯は溢るるなり」と詩篇23篇を口ずさんでいた。この詩はダビデ王が息子アブサロムに王位を奪われ、荒野を逃がっている時にもなお「わが杯は溢るるなり」と神への信頼を吐露したものである。ダビデと同じく石原も自らの弱さ、孤独を知りつつ神に依り頼んでいたのである。「石原先生が壁に向って涙し、祈っておられた」という実話がある。しかし表面上に現われる石原は柔とした強さを持ち、決して悩める人、弱い人という姿を見せない人である。石原の友人 Miss Nelson は、「遂げ難い夢を心に抱き、打ち敗かし得ぬ敵と戦い、耐えられぬ悲しみに耐える。勇士も行かぬ所を走る。はるか彼方から来る純潔を愛し、腕が疲れきっている時にも挑戦し、達し得ない星にまで及ぶ。これこそ私の探求の目的物、あの星を追ってゆくこと如何に絶望的であろうとも、如何に遠くであろうとも」という“The Impossible Dream”という詩は、全く石原の為にあるような詩だという。まさしく表面上の石原を明示している。石原のその勇気と力、内面から沸き上がるエネルギーは、ただ神の命令にのみ聞き従うことによって生れるのである。即ち信仰は、教育に対する情熱の源泉なのである。

(2) 石原キクの教育の信念

学校法人東京保姆伝習所設立の時、文部省に申請する、建学の精神草稿に「キリスト教精神に基づいて、奉仕に生き、日本婦人として徳の高い女性を育成する」という文章があった。これが石原の教育目標であった。聖書の「私を信ずるこれらの小さい者の一人を躓かせる者は、大きなひき臼に首をかけられて、海の深みに沈められた方がその人の益になる」という言葉に従っ

て、子どもを保育する女性を育成していた。石原は常に自分の生命を注ぎ込む気迫を持って、弟子の前に立っていた。昭和42年11月27日召天の直前、一人の弟子に「貴女方は一人一人に、自分だけにしか出来ない、神から与えられた務めというものがある筈です。どんな小さな灯でも、如何に世の荒波が烈しくろうとも、その小さな光を絶やさないで努力をして、神の前に立つ日まで、悔ゆることのない日々を過し、世の人々の為に最善の力を尽くして、どうぞ一生懸命頑張ってください」と語った。石原は目の前にいる在学中の弟子を見ていたのではなく、その弟子が神の許に帰る日までの長い生涯の為に、不動の基礎を、自分の手許にある僅か2年という短い月日の間に、作ってやろうという思いで必死だった。勉強ばかりでなく、生活感覚、社交上の儀礼、躰、保育者としての心構え、掃除の仕方等、総ての面において、自分の持てる限りを注ぎ尽くして、弟子を教育した。

Ⅲ. 石原キクの人間性

(1)石原キクの厳しさ、(2)優しさ、(3)ユーモア

(1)石原は常に自分の弟子一人一人に神の名譽、伝習所の名がからっているという思いを持っていた。それは、50年前も、30年前、15年前も同じであった。自習時間遊んでいる学生を見つけると、目から火が出る程叱責した。「やがて、先生になる方々だから、この学校は自治制でやっている。それを自習時間に勉強もしないで遊んでいるとは何事ですか。そのような人達はたった今、行李を持って家に帰りなさい」「私はこの学校から、肩は出したくありません」と言うのであった。石原は勉強する事は自主自立の基本であり、保育者としての基本を作ることと考えていた。幼な子を躰かせる者は、神への反逆者であるというキリスト者の持つべき保育者精神を、幼児理解という点から考えると、学びとキリスト教の信仰は、保育者にとって車の両輪であると考えていた。その考えが根底にあって、石原の厳しさは即ち自分の弟子が神への反逆者になってほしくないという愛の表現であり、「子どもの前に立つ教師には、如何に厳しく教育してもしすぎる事はない」というフレールレベルの言葉と全く同じ思いから出たものであった。(2)石原の優しさは、困っている人、弱い人、病める人には、真実溢れる温情を持って、具体的な解決を計り、細かいところまで十分に配慮し、受ける者の身になり切って、愛を注ぎ込むのであり、その時は、石原は自らをどこかに忘れて来てしまう程の身のいれようをするのである。(3)石原のユーモア、石原の小さな身体に秘めたエネルギーは、いつも困りを大きく動

かすのである。私共の卒業謝恩会の時、写真屋が手間どって、皆いらいらし始めた時、持っていたバラの花を高く捧げ、10歩程後ずさりし、宮廷の貴婦人のような裾の広いスカートを持つ真似をして、静々と歩き、紳士の前に立ち深々とおじぎをして、バラを差し出された。花を受け取られた心理学のA先生は、赤い頬をしてモジモジされ、皆一斉に爆笑し、そのチャーム的なユーモアに拍手を送り、良き記念写真がとれたのであった。

Ⅳ. おわりに — 石原キクの遺産 —

石原は弟子の一人一人の魂にその高尚な生涯と勇姿を焼付けていった。石原はたとえ、死の影の谷を歩もうとも、神がともにいて下さるなら、何も恐れるものはなし、常に祈り、神に杯を満たしていただきながら、前進するというのが基本であった。しかし、決してその力を、自分一人の為に使うのではなく、総て他に分け与え、愛を注ぎ、実践し行動した。その凜然とした強さ、細やかな愛、美しいにこやかな姿が、石原に持した一人一人の中に脈々と流れている。戦時中、伝習所に奉職しておられた外国人宣教師が、外出を止められた時、石原は自分の食事すら忘れ、絶えず見舞いに行き、身体の不調が無いが、食事は足りているが、非常に心配され、心配りをしたのである。敗戦を迎えた日から何日もまたずして、マッカーサー元帥から、お礼の使いが石原の許にとどいた。しかし石原は、戦争中の日本政府が宣教師にとった態度こそ、相済みぬことであると胸を痛め、日本人として良心に恥じていたのであった。学校運営に対しても非凡な才能を見せていた。Miss Nelsonは「彼女が伝習所長になって、僅か数年たった時、米国バプテストミッション委員会は、経済恐慌の為に送金する事が出来なくなり、学校を閉鎖してはどうかと手紙を出した。石原さんは閉じる事を拒絶し、総ての責任を自分が持つと約束し、47年間継続して学校経営の費用は、総て彼女の才覚と資産によってまかなわれた。日本の幼稚園は彼女の指導と教育により高いレベルに引き上げられた」と米国で公表している。石原は昭和15年に財団法人東京保母伝習所を設立し、理事長、学校長に就任し、昭和34年学校法人へと改組し、弟子の教育に邁進した。昭和38年ウェスターン大学から人文学博士の学位を贈られ、昭和42年勲五等瑞宝章を授与された。誠に石原キクは、日本の幼児教育の黎明期から、その生涯の終り昭和42年に至るまでの半世紀間、豊かな国際感覚を持って、保育者養成ひとすじに生きて、偉大な教育者であった。

※Miss Bann著「Miss Kiku Ishihara」